

## シンポジウム

### ファシリテーター

日本生徒指導学会関西地区研究会 副会長

桶谷 守

### シンポジスト

日本生徒指導学会副会長 日本生徒指導学会関西地区研究会会長

新井 肇

国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター総括研究官

高橋 典久

摂津市教育委員会 学校教育課指導主事

馬田 健太

明石市立大久保北中学校

角野 美奈子

明石市立魚住東中学校

田中 秀輝

## ・シンポジウムの概要

立場の異なる4名のシンポジストが、「発達支持的生徒指導の具体化に向けて」について、基調講演及び、国の取組、市町村教育委員会の取組、学校の取組による話題提供を行う。



## ●発表要旨

### 高橋 典久 「魅力ある学校づくり調査研究事業について」

不登校児童生徒数を「その年度に新たに不登校になった児童生徒数」、「前年度から不登校状態が継続している児童生徒数」に分けて分析すると、半分以上が「その年度に新たに不登校になった児童生徒数」である。学校外の多様な受け皿を整備するだけでなく、未然防止の取組が重要である。児童生徒の「居場所づくり」、「絆づくり」を行い、登校し続けられる学校づくり（魅力ある学校づくり）をすることで、「その年度に新たに不登校になった児童生徒数」が減少し、全体の不登校児童生徒数の減少につながる。より効果をあげるためには、中学校区全体で9年間を見通した未然防止の取組を行うこと、すべての教育活動の中に生徒指導を意識することが重要である。これからも、プロアクティブな生徒指導をすること、授業の中で生徒指導を行うこと、チームで取り組むことを子どもの意識調査（子どもの声）を元に、PDCAサイクルを回し、自治体、学校と共に取り組んでいく。

## 馬田 健太 「こどもが自治する学級・学校づくり」

摂津市では、これまで不登校者数の増加が課題であったことから、平成30年度より2年間、国立教育政策研究所による『魅力ある学校づくり調査研究事業』の指定を受け、第五中学校をモデル校として取り組んだ。その結果、モデル校の不登校者数の減少が見られた。

摂津市の暴力行為発生件数や不登校者数の増加を踏まえ、令和5年度より、第五中学校校区をモデル校区として、『魅力ある学校づくり調査研究事業』の後継事業である『こどもの発達を支える生徒指導に関する調査研究事業』の指定を受けた。

モデル校区では、児童生徒の主体的参画、生徒指導との関連を意識した魅力ある学校づくりを行った結果、令和5年度は全校で不登校者数が減少し、「その年度に新たに不登校になった児童生徒数」がどの学校においても減少した。

取組の普及のため、市教育委員会としては、趣旨理解のための学校訪問、校内研修、先進校視察、定期的なモデル校区の合同研修会等を行った。今後も、市内全校に生徒指導提要や国事業の趣旨を広げ、教職員も子どもも魅力ある学校とはどんなものかを意識し、こどもが自治する学級、学校づくりに向けて取り組んでいく。

## 角野 美奈子・田中 秀輝

### 「『生徒指導と学習指導の一体化』明石市立魚住東中学校の取組」

明石市立魚住東中学校では令和2年度から3年度に、明石市教育委員会生徒指導指定研究に取り組んだ。

全国学力学習状況調査などの結果等の分析を行い、生徒の現状を職員全員で考えた。その結果、「自己肯定感」、「他者理解」、「協働」、「問題解決能力」、「チャレンジ」をキーワードとして取り組みを行った。具体的には、各教科で小集団活動などを授業に取り入れた。この活動を繰り返すことで、生徒から色々な意見が出てくるようになったり、自分の意見を言うのが苦手な生徒も発表するようになったりするなどの効果があった。また、「問題解決」や「チャレンジ」を意識して、意見交流や発表の活動を多く取り入れたり、振り返りを工夫したりした。

さらに、生徒自身に自己肯定感を育てるためにはどうすればよいかをテーマに話し合いをさせたり、校則を検討させたりした。

これらの取組から、学校で「協働」、「他者理解」を行うことで、「問題解決」や「チャレンジ」ができるようになり、その中で「自己肯定感」が高まること。そして、生徒が落ち着いて学習に取り組むことができ、楽しく学校生活を送ることができること。授業作りは学級作りであり、学級作りは授業作り、学習指導は生徒指導であることが示唆された。このような実践に今後も取り組んでいきたい。

## ●質疑応答

### 教員間で発達支持的生徒指導を広めていくためには何が必要か。

- ・「どんな学校にしよう」、「子どもたちがこうなるといいな」、「子どもの声を聞きながらこんなことをやってみよう」など、みんなで目標を立ててみんなで取り組む、ボトムアップの取組が大事である。
- ・教師もチャレンジし、教師も楽しむことがポイントである。
- ・教員同士が学び合うことによって、指導観の転換を行う。

- ・児童生徒がよくわかる授業だから主体的に取り組めるのではないか。ここでのよくわかるはその時間に何をしたらいいのかがよくわかるということ。
- ・雑談等の話をする時間、余白を作ることが大事だというような職員の雰囲気作りが大事。
- ・子どもの声を聞き、全員で同じ方向を向いて取組を行うことが大事。そして、それをそれぞれの立場で価値付けていくことが重要。
- ・教員同士が話し合い、お互いの思いを共有し、教員全体で取組を行うことで児童生徒にもそれが浸透していく。
- ・研究指定に取り組む。
- ・今まで先輩方から教えていただいたことを整理整頓、言語化して、学校の目標に生かしていく。
- ・学校内で対話する（学び合う）雰囲気を作る。

### **生徒指導提要の中の特別支援教育の視点について教えて欲しい。**

- ・生徒指導の目的は個性化と社会化であり、両方のバランスをとりながらどう進めていくのかが課題であり、そこが学校教育の本質なのではないか。
- ・私たちが発達障害のある子どもたち、様々な背景のある子どもたちが共生社会の一員となるように育つことをどのように応援していくのかが問われている。同時に、周囲の子どもたちが、「いろいろな人がいてもいい」ではなく、「いろいろな人がいた方がいい」という姿勢を実感して身につけるように働きかけることが求められていると言えるのではないか。

### **●記録者雑感**

児童生徒を取り巻く社会環境の急激な変化や抱える課題の深刻化がみられる。生徒指導提要（改訂版）では、「させる生徒指導から支える生徒指導」への教職員の指導観の転換、「発達支持的生徒指導」の理解・実践が求められている。このためには、生徒指導の4つの視点を授業の中に埋め込み、学習指導と生徒指導の一体化を図ること。学校は、子どもの声を聴きながら、ボトムアップで目標を作り、専門家、関係機関、地域、保護者等と連携・協働をすすめ、取組をPDCAで回していくことが重要である。これからの生徒指導の方向性を考える上での示唆を得ることができた。